

18世紀イングランド南部農村地域の店舗主（上） —トーマス・ターナーの営業活動を中心に—

道 重 一 郎

1. はじめに
2. トーマス・ターナーの店舗経営
3. ターナーの取扱商品のなかの食料品
4. ターナーの営業活動における衣料品
5. その他の取扱商品（以上、本号）
6. 農産物とぼろ布の取引
7. 流通の拠点と送金業務
8. 顧客層と地域の結節点としての店舗
9. おわりに

1. はじめに

かつてJ. H. クラパムは、行商人などの衰退を理由として、イングランドにおける近代的小売商業の起点を19世紀初頭にあると考えていた（Clapham [1926]）。これに対して、J. ジェフリーズは小売商業の大規模化を近代的商業への転換点とし、19世紀半ばをその転換点と考えた（Jefferys [1945]）。一方、アレクサンダーは固定店舗の発展と販売手法の変化から、19世紀前半に近代的な小売商業の起点を求めるとしてジェフリーズを批判し、クラパムに回帰した（Alexander [1970]）¹⁾。しかし、近年の小売商業に関する研究は、18世紀イングランドの都市的な発展に対する関心を背景として、さらに早い時期にその焦点が移っている。ウォルシュ（Walsh [1995]）やストバート（Stobart [1998]）、あるいはN. コックス（Cox [2000]）などの研究では、18世紀ロンドンや地方都市の主要な街路にショッピングセンターが形成され、小売販売が中流階層の「上品な」文化の中で重要な社会的なつながりを生み出す存在となっていたことを明らかにしている²⁾。

1) これらの論争については道重 [1989] pp. 128-32を参照。

2) 都市と商業との関係については、小西 [2015] を参照。

このように都市における小売店舗の経営に関する研究は近年大きく変化し、都市的な発展と結びついた消費社会の結節点としての小売商業の役割が評価されてきている。その一方で農村部の小売業については必ずしも十分な進展があったとは言いがたい。農村部に関しては、本稿で取り上げるトーマス・ターナーの日記の存在がこれまでも広く知られており、農村部の小売商の例証として取り上げられてきた³⁾。またイングランド北部カンバーランドの小さな町カークビー・ステューブンの商人アブラハム・デントに関するウィランの研究が存在するが、これ以外には十分な研究が進んでいるとは言いがたい (Willan [1970])⁴⁾。とりわけターナーの日記に関しては、研究史の中で断片的にかつ頻繁に取り上げられてきているが、その全体像を提示したものはそれほどない。これは日記の史料的性格によるものと思われる。その性格上、日記の記載は断片的で数量的にも帳簿類のように明確な数量や金額を把握することはできない。その意味で、この日記の取り上げ方が「つまみ食い」的にならざるを得なかったものと考えられる。

しかし、日記は帳簿類とは異なって具体的な状況の記載がなされており、また日記作家の感情を反映した表現も見いだすことができる。そこで本稿の目的は、このターナーの日記を主な史料として、農村部における小売業を含む店舗主の営業活動とその社会的性格を確認することにある。ターナーについてはすでに何回か触れる機会があったが⁵⁾、彼の日記をあらためて包括的に整理することによって、18世紀中葉の農村部における店舗主がイギリス全体の市場構造のなかでどのような機能を果たしたか、またどのような社会的存在であったかを明らかにしたい。

そこで、最初にターナーの店舗立地など一般的な状況を確認した上で、取扱商品を順に検討する。さらに、彼の農産物取引やロンドンを基軸とする信用ネットワークとの関係を検討し、また顧客層との関係を確認し、最後に全体としてターナーの経営の性格を総括していきたい。

2. トーマス・ターナーの店舗経営

トーマス・ターナーはイングランド南部、サセックスの店舗主 *shopkeeper* で、1754年2月から1765年6月までの日記を残したが、この日記はデヴィッド・ヴァースィの校訂によって刊行されている。公刊された日記は、一部省略があるものの、近隣住民と彼の交際、家族関係、宗教観など様々な部面を含み、またターナーの営業活動に関しては詳細に記述されている。本稿は、公刊されたこの日記を主たる史料として、18世紀中葉のイングランド南部農村の店舗主の経済的な活動を、営業

3) Turner [1984], *The Diary of Thomas Turner, 1754-1765*. ed. by D. Vaisey, Oxford UP, Oxford. 但し、本文中の参照箇所については、文中の()内の数字で引用箇所のページを明示する。

4) その他、Mitchel [2014] でも部分的に農村小売業者について触れられている。

5) 道重 [1989]、[1998]、[2005]。ことに道重 [1998] では販売商品に関する簡単な分析をおこなっているが、本稿ではその他の側面を含めて、全体像の検討を目的としている。

活動を中心にできるだけ包括的に検討する。

ターナーの店舗があったイーストホースレイ村はサセックスの中央部ハイ・ウィールドと呼ばれる丘陵地の南の際にあり、海浜の観光地として発展しつつあったブライトンに近い農村地帯で、ホップや羊毛を主要な農産物とする農村地帯である。同時に、この村はロンドンから南へ直線で約50マイルにも満たない距離にあり、ターナーの日記に従えば、朝6時半頃この村を出発して、途中で朝食をとっても昼前にロンドンに到着するという近さであった（144）。このためロンドンからの影響は決して無視できないものがあり、加えて村の近くにはホイッグ党の有力政治家ニューカッスル公爵の所有するホランド館があり、毎年夏には公爵をはじめとして多くの関係者が集まっていた点も、ロンドンからの影響を強めたものと思われる。一方、この地域の中心的な都市はルイスであり、ターナーが商品の仕入れなどに利用したのもこの町である。ルイスはノルマン朝以来の城や修道院跡のある歴史のある町で、巡回裁判所もこの町で開催された（292）⁶⁾。

ターナーはこの裁判所の陪審を務めるためルイスに赴いたり（145）、地租や窓税の代理徴収をおこない（292）、教区教会の会計も務めるなど（317）、地域社会で一定の役割を果たしていた。また、彼は中流階層の所属する地域のクラブMayfield Friendly Societyの会員となっており（99）、自他共に中流階層の一員として認められていたことなる。中流階層としての意識は、彼の日常生活ではしばしば飲み過ぎて反省し自戒することも多かったが、自らの営業に自信を持ち上流階層の安易さに流れることを批判的に見ているところにも現れている（160）。

ターナーの父ジョンもトーマスと同様に店舗経営をおこなっていた。この店舗はイーストホースレイではなく北に3マイルほど離れたフラムフィールドにあり、1752年の父の死後ターナーの母を弟モーゼスが助けて営業を継続し、最終的には弟がこれを相続している（180-2）。編者のヴァースィによれば日記の始まる数年前の1751年に、トーマスはイーストホースレイ村での小売店舗経営を開始したと考えられている。この経営は母の経営とは別個におこなわれたが、商品仕入れなどはしばしば共同でおこない、営業活動では密接なつながりを持っていた。

ターナーの店舗は寡婦であったウェラー夫人から年間地代£8で賃貸しており、その他にも様々な馬小屋、穴蔵（セラー）などを利用しているが、少なくとも倉庫はヴァーゴなる人物から年50sで借り受けたものであった（7-8）⁷⁾。こうした営業用の不動産に加えて、果樹園をもっていたと思われる、その手入れに関する記述もある（42）。また、小売店舗経営と同時にホップの取引に関わってもいるなど、小売商業だけでなく多角的な営業活動をおこなっていた（46）。

6) 都市ルイスについては道重 [2005] を参照。

7) 本稿では金額を表示する場合、1ポンド5シリング3ペンスを£1, 5s 3dなどのように、ポンドは£、シリングはs、ペンスはdで表示する。なお、£1=20s=240dである。

この店舗では、ターナー自身と妻、家事奉公人の女性と何人かの徒弟を使って経営がおこなわれていた。1757年6月の記述によれば、ターナー自身、妻、女性奉公人、徒弟二人とともに教会へ出席しており、ターナーの家計はこの時点では五人で構成されていたものと思われる（99）。徒弟のうち一人は彼の異母姉の息子フィリップであり、宿泊、食事、衣料を含めた費用年£5で預かることに合意している（85）。最初の妻マーガレットとは1753年に結婚するが、彼女は病弱であったようで家庭内はこうしたことを原因として余り穏やかなものではなかったと思われる。日記は結婚後しばらくしてから始まるが、妻との諍いがしばしば登場し、1761年に妻が死亡し65年に再婚すると日記も終わる。明示されていないが、この日記の編者ヴァースィは家庭内の不安定な状況が日記を残す一つの要因であった可能性があるとして指摘している（xxvi）。

家族的な経営において主婦としての妻のもつ重要性は、18世紀前半にダニエル・デフォーが『完全なるイギリス商人』のなかで「商人が彼の妻に彼の仕事を教えることについて」という章をわざわざもうけていることにも現れている。彼は、賢明な商人は妻が夫の仕事をよく知り、万が一の場合にはその仕事を妻が継承できるようにしておくべきであると主張している。デフォーは、商人たちが自分の妻に地主の奥方のようになることを望み、「彼女が談話室で客を迎え、お茶を飲み近所の人々と交歓し、あるいは馬車で出かけるように」仕向けていると非難している（Defoe [1727], p. 292）。とはいえ、顧客とつながりを持って社交をおこなうことは小売商人にとってむしろ不可欠な要素であり、女性の役割としても無視できない側面であったことも注意する必要がある。

その一方で、ハリファックスの中流階層に関する研究では、18世紀初頭までは夫の死後その営業を妻が単独で継承する比率が大きいが、18世紀中葉になると他の遺言執行者と共同に経営していく傾向が増加しているとされている。さらに18世紀後半には中流階層上層では、経営から女性を排除することは身分的上昇の証であると見なされ、寡婦が経営の継承から全く排除される傾向が顕著であるとされる（Smail [1994], pp.167-75）。

しかし、ターナーには女性を経営から排除しようとする姿勢は見られない。トーマスの母は父の経営を継承しており、弟の助けを借りてはいるものの、死亡するまで店舗経営の中心にいた。この点は、母の店舗との取引関係において、弟とは別途に決済をしていることから推定できる（188）。一方トーマス自身の妻も、教区牧師などが参加する中流階層の人々とおこなわれたパーティーにも出席しており、彼女が中流階層の妻としての社会的な役割を果たしていたことも明らかだが、同時にしばしばターナーとともにタバコの梱包をおこなうなど夫の仕事を助けており、妻が店舗経営において重要な存在であったことを示している（96）。

このように、ターナーの店舗経営は農村のなかで家族的な経営において営まれていたものと思われる。彼の経営の大きさは必ずしも明確ではないが、1756年8月の記述によれば、「この時期、たいてい週£15から£20の売り上げはあったし、£15から£30の時もあったが、今は£5からせいぜ

い£10を上回らない。」と述べて、売り上げの不振を嘆いている（61）。18世紀末の課税評価額において、店舗主の年間収入は£50から£180であり、平均は£90弱であるとされている（Mui & Mui [1989], p.139）。また、ランカスターの鉄商人W.スタウトの営業利益率は約31%程度と見積もられるので（道重 [1989], p.158）、ターナーの収入もこの平均程度である£90とし、粗収益率が30%程度であるとすれば年間売り上げは£300と推定される。一方、週の売り上げが£15程度であるが、日記の記述にもあるように1年の間にはかなりの変動があるので、これを考慮して平均£10程度とすると£500程度となる。これに対して、イングランド北部の店舗主アブラハム・デントの1763年における年間売り上げは約£500であった（Willan [1970], p.24）。北部の小市場町に立地するデントのような店舗主と南部農村部の小売商とを直接比較することはできないし、デントが醸造業者を兼業したり委託生産した靴下をロンドンに大規模に販売していたりすることを考えれば、彼の年間売り上げよりもターナーのそれが大幅に上回るとは考えにくい（Fowler [1999], p.45）。収益率や週平均売り上げなどが推定値であるからかなりおおざっぱなものにならざるを得ないが、これらを前提とすればおおよそ£300を大きく超えない程度の売り上げがあったものと思われる。

18世紀イングランドにおいて、ロンドンなど大都市では特定の商品に特化した専門小売店が増加しつつあった。食料品においても茶の消費拡大に対応した専門食料品店なども登場するなど、専門店化が進行したといわれている（Mui & Mui [1989], p. 48）。しかし、その一方で19世紀に入っても地方ではなお万屋的な小売店舗が広範に存在していた（Alexander [1970], p. 98）。ターナーの店舗が立地した農村部においてはこうした傾向がより大きかったものと思われる。そこで次に、彼がどのような商品を取り扱ったかを食料品、衣料品、その他雑貨品の順で検討しよう。

3. ターナーの取扱商品のなかの食料品

ターナーの日記では販売したものをしばしば記載しているが、販売された商品の全てを記しているわけではない。他方で、購入した財貨からは自家消費向け購入と販売目的の仕入れとを区別することは難しい。第1表では日記の中で購入されたり、販売されたりした財貨を一覧表と示している。販売した商品から見る限り、やはりターナーの店舗は万屋的な内容となっていることは明らかで、衣料品、食料品、文房具や雑貨などきわめて多様な商品が取り扱われていたことが分かる。そこで、これらの商品がどのように取り扱われたかについて、日記の記述をもとに順に検討してみよう。

まず食料品を取り上げる。食料品は生活に欠かせない基礎的な消費財でありながら、遺産目録などにはその記録が残らない。このため日記は食料消費市場の特質を示すものとなる。18世紀は新奇な食料品が広く導入され始めるなど、イングランドの消費生活を変化させているので、農村におけるこうした広がりを検証する意味で、店舗主ターナーがどのような食料品を取り扱ったかは貴重な記録となる。

第1表 ターナーの取扱商品

		販売した商品		購入した商品	
食料品	酪製品	バター、チーズ		バター、チーズ	
	酒類	ワイン、ブランデー		ワイン、ブランデー、ジン	
	肉類	豚肉		牛肉、豚肉	
	魚介類	塩漬け魚		海老、鯨、他	
	塩			塩	
	外国製品	茶、コーヒー、チョコレート、砂糖、香辛料、レーズン		レーズン、茶、砂糖	
	穀類・パン類			小麦、オート麦、ブレッド、ジンジャーブレッド、スウィートハート(菓子?)	
衣料品	既製品	紳士もの	コート、ウエストコート(チョッキ) プリーチ(半ズボン)、スーツ、ネッククロス	紳士もの	コート、ウエストコート(チョッキ)、プリーチ(半ズボン)
		婦人もの	ガウン	婦人もの	エプロン
	布地	シャイ織、ファレット織 アイリッシュ織		サック織、フランネル織 紗、コート用布地	
	服飾小物	レース、、リボン、ハンカチ、ボタン		レース、絹のボンネット、マンチェスター製品	
	その他	ホーズ(靴下)、リボン、帽子		手袋、帽子	
	文房具			紙、鴛鳥ペン、トランプカード 鉛筆、物差し、ハサミ、インクパウダー	
書籍	辞書、聖書		暦		
雑貨	タバコ、火薬、釣り針		箒、ブラシ、髭剃り箱とブラシ、パイプ 櫛、針、かつら、石鹸		
食器			陶器、壺、木皿		
靴			靴台(パッテン)、木靴、靴		
皮革製品			熊皮、セーム皮		
寝具	長枕、ベッド、その他				
建築用品	釘、スレート		レンガ、材木、釘		
農具			大鎌		
その他	ポロ布(ラグ)		蜂の巣箱 棺桶		

出典：Turner [1984] より作製。

日記の中で購入が記録されている食料品はチーズ、バターなどの酪製品、茶、コーヒーなどの新奇な飲用食料品、ブランデーやワイン、ジンといった酒類、パン、肉類、魚介類などが含まれている。難破船から競売で豆やレーズンなどの食料品を購入しようとした記載もあるが、海水につかっいて売り物にならないと断念している(140)。一方、穀物についての記録はあるが全体として購入量が少なく、自家用と思われる。

(1) 酪製品

まずバターについてみると、18世紀イングランドにおいて商品の性格上、地域内で生産と消費がおこなわれる傾向が高かった。ことに保存がしにくい新鮮なバターは地域内での販売に頼らざるを得なかったし、生産地から離れた場所での販売には塩をかなり多く添加する必要があった(Peren [1989], pp.214-5)。しかし、塩を添加したバターよりも新鮮で塩の添加量の少ない方が小売価格は高かったため、距離の離れた市場での販売のためには迅速な輸送が求められた。より多く塩を添加

したバターとあまり塩を添加していないバターの価格差はロンドンで1重量ポンド (lb)⁸⁾あたり3d程度あり、この差額の存在が比較的運送コストの高い馬車輸送を利用しても収益を確保することができたとされている (Gerhold [1993], p.106)。

日記のなかで記録されているバターの購入量と単価は、1回目は84lbを£2, 2sで、2回目は60lbを£1, 10sで、1lbあたりの価格は6dである (7, 198)。1750年代後半に海軍が購入したバターは記録上1lbあたり5.28dとされてはいるが、実際にはこの2/3程度の価格で購入されているといわれている (Holderen [1989], pp. 113-4)。その点では、ターナーの購入したバターはかなり割高で、塩の添加量が少ない新鮮なものであったと思われる。購入先はいずれもイーストホースレイ村近郊の有力な借地農業経営者であったウィリアム・パイパーとジェレマイア・フレンチであり、ターナーは近隣で生産される新鮮なバターを仕入れていたものと思われる。とはいえ、18世紀末に至るまでバターの小売販売は週市などで生産者から直接おこなわれることが多かったとされている (Scola [1992], p. 203)。たしかにターナーのバター購入量はかなり大きく自家需要を上回っているが、販売用としてはそれほど大きいものではない。ターナーは91lbのバターを£2, 5s 6dの価格で販売しているが (198)、これはポンドあたり6dであり利益は全くない。1755年のバターに関する記述もコーリィ夫人からのバターをジョン・ウィリアムに送るとされていて、金額は記載されていない (12)。バターの販売は、地域内のバター流通を媒介したものというべきであろう。

バターに比べてチーズは比較的遠距離の輸送に耐え、チェシャー、ウィルトシャー、グロスターシャーなどからロンドンへ安定的に供給されていた。生産者から仲介業者であるファクターを経由してロンドンなどの消費地へ販売されることを常としていた (Peren [1989], pp.253-4)。ターナーが購入販売していたチーズもチェシャーやウォリックシャー産のチーズであった⁹⁾。これらはケント州のメイドストーンの定期市で購入されたり、近隣の都市ルイスで購入されたりしている。メイドストーンで購入される場合は本人が出かける場合もあるが、ターナーの依頼を受けた代理人がチーズだけでなく砂糖などの購入やぼろ布の販売をおこなうこともあった (190)。

メイドストーンの定期市においてターナーが購入したチーズの価格は、1759年のチェシャーチーズの場合、1cwtあたり27sであり、1lbあたり約2.9dとなる (191)。当時のロンドンにおけるチーズの価格は、グリニッジ病院の史料から120lbあたり£1.56 (1lbあたり約3d) とされているから、ほぼ同様の仕入れ値である (Holderen [1989], p. 114)。18世紀の中葉においてチーズがかなり広範囲に流通し、価格もある程度平準化していることが分かる。

8) 本稿では、重量の単位を以下のように略記する。重量ポンド=約0.45kgはlb、ハンドレッドウェイト=約50kgはcwt。但し、ストーンstone=12lb=6350kgは略記しないで、そのまま表示する。

9) ウィルトシャーのチーズがウォリックシャー産として販売されていた。Peren [1989], pp. 52-3を参照。

販売価格は分からないが、チーズは塊で少額の利益を乗せて、小売していたものと思われる。1759年12月の記述に、「アトキンス夫人は丸ごと売ると同じ価格で切って売らなかったと言ってひどく腹を立てていた様子であった。私はチェシャーチーズに1lbあたりたった1ファージング(0.25d)ほどの少額の利益を加えているだけであるから、私はチーズを切ろうとしなかったのである。」さらに、チーズを塊で販売していたのはチーズを切ると切屑がでて損失が大きくなるからで、少量のチーズを切り売りすると割高になるのはやむを得ないと主張している(195)。

(2) コーヒー、茶、チョコレート

コーヒーや茶、チョコレートなどの飲料は異国風の飲み物として男性の社交的な集まりの中から広がっていったが、18世紀になるとさらに拡大して家庭の中にも浸透するようになって、特に中流層の生活にとって欠かせないものとなっていった。価格は18世紀を通じて徐々に低下していったが、労働者層に浸透するようになるのは18世紀末と考えられている(Berg [2003], pp. 366-7)。ターナーがこうした食品を取り扱っていたことは農村部でも中流階層を中心に消費が拡大していたことを示すものとなる。ターナー自身も親しい人たちと頻繁に茶やコーヒーを飲んでいた。

茶の販売に対する課税は1724年に始まり、その後何回か改正がおこなわれているが、一般に茶、コーヒー、チョコレートなどの販売者は、販売する店舗、倉庫などを近隣の内国税務事務所に登録することが義務づけられており、販売場所としての店舗を明示する必要があった(Mui & Mui [1989], p.32)。さらにこの時期、茶の販売はかなり厳格に管理されたと考えられる。例えば、ターナーは1758年4月にジェームズ・ブルという人物に2s 2dを渡しているが、これはこの人物が「買ったばかりの茶2オンスを他の人物に譲ったことで£5の罰金を命ぜられた」ことに対して、彼が近隣の人々に慈善的な寄付を求めたからであった(145)。茶はこうした課税によって販売価格はかなり上昇しており、上述のアブラハム・デントも茶を緑茶は1lbあたり10sから10s 6d、紅茶でもものによっては11s以上の価格で販売していた(Willan [1970], pp. 9-10)。

しかし、ターナーが茶やコーヒー、チョコレートなどをどのように販売したかは、明示的に日記には登場しない。とはいえ、チョコレートを£1, 5s 3dで購入したことが記録されているし(220)、在庫しているコーヒーとチョコレートについてコーヒー3.5 lbには4s 4.25d、チョコレート1lbには9dの間接税をそれぞれ支払っている(183)。また1762年6月にこれらの商品に関する間接税確認のための帳簿をルイスに運んだと記されている。これらのことから販売目的で在庫していたことは明らかである(249)。ターナーは茶も販売していたと思われるが、その規模は明らかではない。しかし、イングランド南部の農村部においても、茶の飲用はかなり広範囲に広がっていて、中流階層であるターナーも日常的に茶を介して社交する機会を持っていたことは明らかだが、茶の流通は厳しい課税を伴うものであった。

（3）砂糖

砂糖はコーヒーと並ぶ植民地物産であるが、茶やコーヒーの消費が増加すればそこに添加される砂糖の消費も同時に拡大するという意味で補完財的な性格をもっており、17世紀後半以降のブリテンでも消費が拡大していった。西インド植民地で生産されたこの砂糖が、膨大な富を形成したことは周知の通りである（川北 [1983], pp. 160-67）。ブリテン全体で砂糖の消費は17世紀後半以降順調に増大してはいるが、価格が低下し始める1720年代になると砂糖の一人あたり消費量は年間10 lbを超えるようになり、イングランドにおいて重要な消費財となり始めている（Shammas [1990], pp.81-2）。

砂糖は日記の中でかなり頻繁に登場する。全部で5回の記載のうち、3回は1cwt以上の大量購入が記録されている。こうした大量に仕入れられた砂糖は茶などとともこの地域における砂糖消費の普及を物語るものであるが、同時に販売先として上流階層への砂糖販売にも留意する必要がある。イーストホースレイ村近くには、すでに述べたようにニューカッスル公爵の居館であるホランド館があり、この館はターナーの得意先の一つであった。1761年の記述では約1cwtの砂糖がホランド館に納められている（258）。ターナーが大量に仕入れた砂糖は価格も決して安いものではなかったこともあり、近隣の牧師、ヨーマンなどの中流階層の消費に応じたものであるが、同時に上流階層向けの大口の顧客がターナーの経営に大きく寄与したと考えられる。

（4）酒類

自家醸造の部分は第1表の取扱商品には含めていない。しかし、ターナーは自ら酒を「醸造している」という記録は存在する（6）。2バレルのサイダーを自宅の庭で瓶に小分けしている記録もあり、2バレルという量から見て販売用の可能性がある（101）¹⁰。一方、自分の果樹園で梨を収穫してこれを梨酒にしている。こちらの場合も60ガロン生産しているので、自家用だけではなくやはり販売にも供されたものと思われる（210）。

このほかに、ターナーはワイン、ブランデーなども取り扱っている。このうちワインは葬儀の際に提供されたものであることが多い。例えば1755年3月8日におこなわれたパイパー夫人の葬儀に際して、その前日にワインを準備して送っている（7）。ワインは葬儀後の会合のために準備されたものと思われる。一方、同じ年の12月にはリーブ夫人の葬儀のためにルイスの町でワインを調達して届けている（18-19）。ワインは販売用に常時在庫していたわけではなく、葬儀のたびに調達したと思われる。

これに対してブランデーの購入量はかなり大きい、1755年1月の購入の際には3桶 tubで49s 6d分を（5）、56年1月には2ガロンを83dで購入し（25）、また1764年には£12, 9dの購入をおこなっ

10) 1バレルbarrelは通常36ガロンgallonで、1ガロンは約4.5リットル。

ている (296)。56年の記述から1 ガロンあたり3s 5d半とすると55年は14ガロン以上、64年は70ガロン弱となり、かなりの分量である。1775年7月にはブランデー4本の代金として4sを受け取っており、サイダーなどと同様に樽から瓶に小分けして販売していたものと思われる (9)。ブランデーの仕入れはかなり特徴的である。ブランデーはロンドンからも購入しているが、55年にはフラム・パリから購入しており、この人物はのちに密輸入の容疑で裁判にかけられてターナーが減刑の嘆願書を作成している (122)。ターナーは「自分も彼から購入しているので、(嘆願書は—引用者)単に善意から書いているわけではない」と述べており、密輸品の購入の可能性が高い。一方、64年の場合は税関での購入であり、これも密輸品を没収したものを販売していたものと思われる (296)。フランスからのブランデー密輸は比較的容易で、ドーバー海峡に近いサセックスという立地がこうしたブランデーの購入を可能にしていたと考えられる。

これら以外にジンを購入している記載があるが、購入量は2ガロンで自家用の可能性が高い。

(5) その他の食料品

これらの食料品に加えて、様々な食品が販売されている。香辛料も母へ£2で売却しているので店で販売している可能性がある (166)。レーズンは1756年に1cwtも購入されており (33)、翌年には教区牧師のポーターへ£3, 1s売却している記載がある (93)。香辛料やレーズンといった輸入食料品は、後に述べるように、ロンドンで仕入れられたものと思われる。農村部においても、コーヒーやチョコレートなどと並んで、これらの輸入食料品が消費されていたことを示している。

ターナーの場合、小麦など穀物に関しては価格の上昇に関する記述はあるが、自身での販売をうかがわせる記述はない。これに対して上述のイングランド北部に拠点を置く店舗主デントは、小麦粉をかなり幅広い階層に販売してた (Willan [1970], p.11)。小麦粉はパンを焼くためのものと考えられ、18世紀末の時期においてマンチェスターのような地方都市ではパン屋で主食用のパンを買うのではなく、小麦粉を焼いてもらうことが一般的であったとされる (Mitchel [1984], p.273)。これに対してターナーの場合には、主食用の穀類はほとんど登場しないことが特徴的である。

一方、ターナーは頻繁にパンを、それも0.5dとか1dなどの少額で購入している場合があり、これらは自家用であると思われる (12, 13)。しかし、1/2ハンドレットウェイトの厚いパン *thick bread* を9sで、同量の薄いパン *thin bread* を8sで、同時に購入している例がある (25)。残念ながら厚さの違いの意味やこのパンが誰に販売されたかは不明であるが、1回あたり1/2cwtという大量の購入がなされていることから考えて自家用とは考えにくい。また、ジンジャーブレッドのパン焼き業者 *baker* から厚いもの14 lb、1グロス (12ダース) のスイートハート *Sweetheart*、薄いパンなど合計8s 9dを購入しているが、スイートハートはおそらく菓子類であろう (219)。その点からこれらのパンは主食用のパンというよりは、菓子類の可能性もある。あるいは、会葬の際に配られるビスケット

トのようなものであった可能性もある。18世紀初めのランカスターの鉄商人スタウトによる自叙伝によれば葬儀に際してビスケットが配られており、葬儀を取り仕切っていたターナーがこうしたことのために準備していた可能性もある（Stout [1967], p.107）。

肉類もかなりの量で購入されている。牛肉を1回に2ストーン（4s 96d）購入していたり（258）、豚肉（去勢豚）を1回に27ストーン購入している場合もあり（22）、自家消費用に購入したとするには量がやや多い。しかし、明示的に販売を示す記述はないので、こうした肉類が常時販売されているとは考えにくい。機会があれば肉類も再販売したものと考えられる。また海老や鯨などの魚介類を大量に購入している。1756年10月28日には鯨1000尾と小海老shrimp1000尾を、構成はわからないが、6人の共同で購入している（69）。数日後やはり鯨を今度は1100尾購入しているが、今回はヴァンスなる人物と共同で購入し、最終的に11人で分けており、ターナー自身は24尾の引き取りであった（70）。これらはターナーがヘイスティングの浜で購入し価格に運賃を加えた値段で最終的な消費者に分配している。営業というよりは、ターナーが中心になっておこなった共同購入とでも言うべきものだろう。1100尾の浜値は16s 6dで運賃も購入コスト同じ16s 6dかかっており、運賃の高さが目立つ。18世紀の魚輸送は生け簀を用いておこなわれたのでかなり高額となる（Scola [1992], p.129）。イーストホースレイ村が海から比較的近いとはいえ、魚の消費はかなり贅沢なものであったと思われる。

ターナーの店は、レーズンやチョコレートあるいは香辛料など外国産の食品やチェシャーチーズなどイングランド内でも遠隔地の産物で、地元では購入できない商品をロンドンやリスなどからイーストホースレイ村へ持ち込んでくる役割を果たしている。ブランデーに見られるように、イギリス海峡に近接する立地から密輸品も販売品目に存在する。その意味でロンドンなどを經由して流入する海外の食品やイングランド国内市場の食品流通の末端に位置して周辺の農村部へ配分する機能をターナーの店は果たしている。同時に、バターや豚肉のように地域内生産物の再配分センターとしての役割をも担っているが、野菜類や穀類など主に週市で取り扱われる生鮮食品は扱われていないので、週市との補完的な関係が推定できる。だが、週市に関する記載が日記にはほとんどないので、この関係を積極的に示すことは困難である。また、ワインは葬儀と関連する形で仕入れられているが、ワインの供給は日常的におこなわれたかどうかは疑問である。むしろ自家製の梨などを利用したアルコール飲料の地元での販売が多かったものと思われる。

4. ターナーの営業活動における衣料品

次に衣料・服飾品について見てみよう。ターナーは衣料品を大量に取引しており、日記からは正確な数量を把握することはできないが、彼の営業活動において重要な部面であったと思われる。

(1) 布地と衣服

ターナーが取り扱った衣料品は布地と既製品の2種類に分かれる。これらの衣料品で販売先が明らかになるものはニューカッスル公爵の居館であるホランド館の執事コートや教区牧師のポーターなどターナーと同等かやや上位の階層に属する人々に対するものである。布地であれ、既製品であれ、彼らへの販売はしばしば注文による販売が見られ、富裕な農業経営者であるフレンチの妻のためにターナーはガウン用のパターンを持って行くなどカタログやパターンによる販売も存在する(8)。

18世紀になると衣料品などにおいてもサンプルカードが販売に用いられるようになり、販売の手法が拡大している(Lemire [1991], p. 141)。この背景にはターンパイク網の発達などに伴って国内輸送網が整備され、また郵便制度の発展によって小荷物輸送が拡大したなどの要因が存在している(道重 [1989], p. 112)¹¹⁾。ターナーの日記の中にも郵便業者に関する記述がしばしば登場するが、商品サンプルやパターンカードを郵便で輸送した記述は存在していない。しかし、彼が郵便を重要なコミュニケーション手段としたことは明らかで、郵便局長から彼の奉公人が無くしたとされる「雑誌およびボタン」の弁償を受けているし(37)、郵便を利用して『タトラー』*Tatler*などの雑誌をターナーは購入しており、ロンドンなど中心地の流行動向にも関心があったものと思われる(50)。

顧客にとっても流行の服や生地に関する情報を知ることとは、とりわけ中流階層上層にとって都市ばかりではなく地方での生活においても重要な要素である¹²⁾。バッキンガムシャーのジェントリであるピュアファイ家の手紙史料には、ロンドンの仕立て業者に「とても流行している服について、最上の服のパターンと一緒に」送ってくれるように依頼している例がある。この依頼に応じて速やかにパターンが送られたようで、発注もおこなわれている(Davis [1966], pp. 229-30)。ロンドンの仕立て業者の評判を聞きつけて直接接合できる社会層は、かなり遠隔地からであっても注文を出すことがしばしばおこなわれていた(道重 [2013], [2014])。しかし、ターナー周辺の中流階層の人々はロンドンへ直接発注をおこなうよりも、ターナーを通じてパターンやサンプルを手に入れ、布地を購入して地元の仕立屋に作製を依頼したものと思われる。ターナーの友人でもあるジェームズ・マーチャントは仕立て業者であり、彼はターナーの指示でホランド館の執事コートのためにルイスまで布地を得るために出かけ(73)、また、彼の顧客のために仕立をおこなっていたとされる(334)。また、牧師のポーターがブリーチ(半ズボン)用にシャイ織を購入しているのも仕立て業者の利用を示唆している(37, 128)。ロンドンなどでは、遠隔地からの注文の場合には仕立て業者が布地も供給していたが、一般的には布地を購入して仕立て業者に衣服の製作を依頼していた(道重 [2013], p.

11) また、陸上輸送については道重 [1996] を参照。

12) 道重 [1999], pp. 91~2。「上品な」消費文化は都市的な要素が強いが、18世紀には農村部への浸透が拡大したと思われる。

4)。これはイーストホースレイ村でもそれほど変わらないと思われる。ここでは素材を提供するのがターナーであり、彼から布地を購入した消費者は、仕立て業者に依頼して衣裳を作製していたのである。一方、ターナー自身は、モリー・デイヴィスに妻のガウン2着の作り替えと新しいもの1着の製作を依頼しており、婦人服については紳士物と異なる仕立て業者が存在していることを示している（41）。

（2）既製服

布地を購入して仕立てるという形がある一方で、ターナーの場合は一定量の衣服の製作を一括して発注し、在庫していた可能性がある。1755年11月にラウンドフロック10着分の布地を裁断した上で、10着分の糸とボタンとともにエリザベス・メファムへ配送し、12月にラウンドフロック製造代金として5sを支払っている（17-18）。ラウンドフロックがフロックコート的一种であるとするれば、布地をターナーが準備した上で10着というかなりの量をまとめて製作させていることになる。同様に3着の綿ウェストコート（チョッキ）をウィル・ハーベイから受け取って製造代金として18dを支払っている（19）。ラウンドフロックを製作したメファムへの支払も1着あたり6dで、ハーベイの場合も6dであり、仕立依頼に関わる費用はおおむね6dであったと思われる。これらの記述は、原材料である布地やボタンなどの服飾材料を提供して手数料を支払う形で製作を委託し、ある程度多くの衣料品を常時在庫していた可能性を示唆している。サイズなどの詳細は記されていないので、一般的な大きさの衣料が作製され、ターナーの妻がガウンの修正をおこなったように、顧客の体型に合わせて事後的に直されていた可能性が高い。流行にそれほど関わらない一般的な衣料品の場合、こうした在庫販売が一定程度おこなわれていたと思われる。

販売についてみると、ホランド館へはお仕着せ用布地のパターンを持っていき、2日後には奉公人用お仕着せのファスチアン製コートを納入している（180）。注文を取ってから納品までの期間が数日と短いので、これらの納品もあらかじめ製作していた既製のものを納品した可能性が高い。また、ホランド館へ納入したのと同じ日に教区牧師ポーターは奉公人や息子用にフロックコートを購入している。ポーターはターナーからコートやスーツも購入しているが、前述のようにブリーチ用の布地も購入しており、布地からの仕立てと既製服の購入とを併用しているように見える。使用人用の衣服はファスチアン織などの安価で耐久性のある布地で作られ、修理もおこなわれることがあり、使用人の衣服と中流階層自身の衣服とは作成方法に違いがある可能性もある（道重 [2014], pp. 67~8）。

既製服は衣料消費を一つの流行に向かわせ、既製衣料品の大量生産が流行の地理的な拡大にとって重要であり、また交通の改善は趣味と消費の統一性をもたらすことに貢献したとされている（Lemire [1981], p.185）。確かに、地方社会においてもカタログやパターンブックにもとづく衣料品

の購入が流行への関心の高さを示しているが、ターナーの営業活動に見られる既製服に関してみると、最新流行とは一定の時間差を伴う可能性が高い。むしろ既製服は、ある程度の遅れを伴いながら流行が地方へ拡大していく際に、初めて一定の役割を果たしたものと考えられる。また、ホランド館への販売に見られるように、既製服を奉公人用に利用した可能性も高い。

(3) その他の服飾品

日記には、手袋をかなり大量に取り扱っていたことを示す記載がある。手袋は葬儀の際に提供される定番の配りのものであり、ワインの際に言及した1755年3月8日におこなわれたパイパー夫人の葬儀に際して、紳士用、婦人用のセーム革の手袋、若者や奉公人用の手袋をターナーは用意している(6)。ターナーは、葬儀後のワインの手配も含め葬儀を取り仕切る仕事をおこなっており、手袋の用意も葬儀の一部で記念品として配られたものと思われる¹³⁾。葬儀の際に仕入れられた手袋の価格は、1755年1月の場合には2組で3sで(5)、2月には外縫いの紳士用22組、内縫いの紳士用4組、子供用外縫い10組の計36組の手袋に17s 6dが支払われており、平均すると約9d半とこの場合かなり安い。3月のパイパー夫人の時には大人用に1s 4d支払われているが、2月の大量仕入れの場合には子供用10組の分だけ安くなっていた可能性が高い(6-7)。

帽子もターナーの日記にかなり頻繁に現れてくる商品である。流行に余り関係のない社会層の帽子購入は、19世紀に入っても反物商draperや万屋的な店舗でおこなわれ、流行を気にする人々は帽子屋に直接注文したとされている(Alexander [1970], p.144)。ターナーの帽子取引では、顧客からの注文に応じて発注したとする記載は見受けられない。ターナーの1755年7月の支払例を見ると、1個の値段は最低1s 6dから最高4sまでで、3個分合計£1, 16sを支払っている(10)。子供用の帽子を仕入れた例もあり、種類も発注量も多様である(204)。一方、富裕な隣人である借地農業経営者フレンチの帽子についてはその製造のための計測をおこなっていたことが記されているので(57)、サイズがあった場合は在庫品を販売し、そうでない場合には顧客の注文にも応じて新たに発注したのであろう。

一方、ターナーに帽子を納入している業者はヘイルシャムのジョン・ジェナーであるが(19)、イーストホースレイ村から10マイルも離れていない農村の製造業者であり、ターナーは近隣の生産者から仕入れていることになる。その意味では流行をあまり反映した仕入れをしているようには思われぬ。また、婦人の頭髮に用いるボンネットに関しては出入りの業者に加工を依頼している(15)。しかし、後述するロンドンの取引において、ターナーは帽子製造業者ジョン・ウィズイン

13) 葬儀に関しては、日記のなかで(77, 95)などにも記述がある。(294)には配ったものとして黒の絹バンド、イタリア製クレープ地、手袋各種などが記載されている。また(236)には棺の購入に関する記載がある。

に£3, 16sの支払をおこなっているの、ロンドンからは流行の帽子を仕入れていた可能性が高い(177)。ターナーは顧客の要望に対応して、様々な種類の帽子を品揃えし、顧客の支払能力と希望にしたがった販売をおこなっていたと思われる。

また、ホーズhoseと言われる編み靴下4ダースの値付けをしており、かなりの量の在庫を確認できる(81、125)。同時に後述するように、マンチェスターグッズと呼ばれる服飾小間物が仕入れられている(15)。マンチェスターグッズあるいはマンチェスターウェアと呼ばれるものは主に綿を素材としたファスチアン織やスモールウェアと総称されるテープやレースなどをさしており、衣料品の縁取りなどの装飾に用いられた。お仕着せ用のレースをホランド館へ納品した記述もあるので、縁取りなどの衣裳の装飾用素材を一定程度在庫していたと見て間違いはない。衣服を作製する際に必要となるボタンなどの他の材料に関しても、記録は多くはないが、糸を一包£5, 15s購入するなどかなりの量を購入している(290)。またボタンに関しては購入の明確な記載はないが、メファムへの作製依頼の際にボタンと糸を材料として提供しているし、弟のモーゼスにもボタンを販売しているので、こうした材料を購入し在庫しているはずである。後述するロンドンでの仕入れ旅行の際に小間物商との取引があり、その際に購入されたと思われる。

ターナーの小売店経営における衣料品の定量的な推定は困難であるが、かなりの比重を占めるものであると思われる。彼はパターンなどを利用してロンドンなどからの流行の布地や装飾品など衣裳の素材を消費者に提供して、農村部においても都市的とされる「上品」politeな18世紀的中流階層の消費を牽引したと思われる¹⁴⁾。また彼は、素材を提供して仕立業者が衣裳に仕立てるといふ当時の一般的な方法とともに、コートやブリーチなどを地元の生産者に委託生産をおこない既製衣料品も販売していた。消費者は、奉公人用など目的に応じて二つの購入方法を使い分けており、ターナーはこうした消費者の意向に上手に対応していた。

5 その他の取扱商品

(1) 文房具/書籍

食料品と衣料品以外の商品のなかで、日記に登場する回数の多いものは文房具である。とりわけ紙類はしばしば登場する。購入量もかなりの量で、1755年7月には11締め(1 ream=480枚)、約5000枚という大量の紙を購入している(10)。この11締めは中質紙が8締め(4s)、茶色紙が2締めと2lbの紙が1締め(4s 3d)となっており、様々な用途に応じて紙が仕入れられている。後に述べるように、大部分の紙はメイドストーンの定期市で購入されており、しばしばぼろ布の販売とセッ

14) 「上品な」中流階層文化については、道重 [1999] を参照。

トになって登場する。一方、大量の購入に対して、紙の販売はほとんど登場しないので誰にどのような使用目的で販売されたかは判明しない。しかし、紙と同様に筆記具として鴛鳥ペンを10ダース(22)、鉛筆を3ダース購入しており(63)、紙の利用にたいする需要は確実に存在していた。

その他の文房具としてはインクパウダー、物差し、ハサミ、暦などがあるが、それほど多くはない。これに加えてトランプカードが何回か登場し、ターナー自身も友人と頻繁にカードで遊んでおり、カードをしたことに対して時には反省する記述も残している(193)。その意味ではトランプカードはこの地域における社交のあり方の一端を示すものであり、ターナーの店はその材料を提供していたことになる。

ターナーは聖書や辞書を販売していると記載しているので、その他の書籍も販売していた可能性がある。一方で書籍を購入した記述はそれほどないが、ターナーは死亡した人の債権債務の精算業務の一部として書籍を手に入れている。ターナーは教員であったトマス・トムセットの死後、彼の資産売却に立ち会い、亡くなった人の債務支払をおこなっているが、その際に紙など文房具とともに書籍を彼自身のために購入している(8、39)。これらの書籍は彼自身が読むためであったようだが、同時に文房具とともに商品として再販売された可能性もある。

(2) 雑貨、その他

ターナーはしばしばタバコの袋詰めをおこなっており、1757年2月には48 lbを129袋に詰めている(85)。これに対応してパイプを大量に仕入れている。1754年3月には12grossをルイスの製造業者ハーマンから購入している(2)。どのようなパイプかは明示されていないが、陶器製のクレーパープの可能性が高い。クレーパープは陶器製のため破損しやすく、使い捨てのような形で利用されたことから大量に購入された物と思われる。タバコパイプの量から考えて、ターナーの店でのタバコの販売はかなり多かったと思われるが、販売先は明示されていない。逆にタバコはごく一般的に、かつ頻繁に販売されたものと思われる。

また、1763年にターナーは大量の針をチチェスターの製造業者から購入している(267)。金額に応じて4種類の針を購入したことが記載されているが、その数は一番多いもので1250本、少ないものでも100本に及んでいる。数が多いので自家消費用とは考えにくい。一般の消費者に販売されたとしてもその数量はかなり大きい。ターナーはメファムヘフロックコートを生産委託をおこなった際にボタンを一緒に提供しているが、こうした業務用に縫製をおこなう人々へも針を提供していた可能性が高く、消費者へ販売する万屋的小売業の一環と単純に言うことはできない。

ホランド館へは火薬を納入しているが、その他に購入している雑貨のなかで多いものは、2ダース購入している石鹼、1ダース単位で購入している木皿や木靴、パッテン(靴台)などがある。1ダース程度だと自家消費用と区別することは難しいが、2ダース購入している石鹼は小売販売用と考え

でも良さそうである。販売面で見ると、枕やベッドも販売していたし、建築資材のスレートや釘を販売している。建築用の資材としてはレンガを100個と大量に購入している。しかし、本格的な家具に関する記述はないし、本格的な住宅建設に必要な資材を調達供給していたとはいえ、修繕のための材料の提供にとどまっている。

食料品と衣料品以外でも、ターナーの店舗では多様な商品が販売されていた。文房具からタバコ、そして釘などの建築用の資材まで、地域の住民に必要とされるものは一通り販売されている。まさに万屋的な小売業と言っていいだろう。しかし、購入した物の中には大量の針などに見られるように、単に小売のためのものばかりではなく一部は業務用と考えてもいいような財貨も含まれている点にも注意したい。

参考文献¹⁵⁾

1. 同時代文献、刊行史料

Defoe, D. [1727], *The Complete English Tradesmen* Vol. I, reprinted by A. M. Kelley Publishers in 1969, New York.

Raffald, Eliz. [1772], *The Manchester Directory for the Year 1772*, published by N. Richardson.

Stout, W. [1967], *The Autobiography of William Stout of Lancaster 1665-1752*. ed. by J. D. Marshall, Manchester UP, Manchester.

Symson, Joseph. [2002], *The Letter Book of Joseph Symson of Kendal*. ed. by S. D. Smith, Oxford UP, Oxford.

Turner, T. [1984] *The Diary of Thomas Turner, 1754-1765*. ed. by D. Vaisey, Oxford UP, Oxford.

2. 2次文献

Alexander, D. [1970], *Retailing in England during the Industrial Revolution*. Athone Press, London.

Ashton, T. S. [1939], *An Eighteenth Century Industrialist, Peter Stubs of Warrington 1756-1806*. Manchester UP, Manchester.

Berg, M. [2003], "Consumption in eighteenth and early nineteenth century Britain". in R. Floud (ed.), *The Cambridge Economic History of Modern Britain*. Vol. I. Cambridge UP, Cambridge.

Clapham, J. H. [1926], *Economic History of Modern Britain*, Vol. I. Cambridge UP, Cambridge.

Cox, N. [2000], *The Complete Tradesman*, Ashgate, Aldershot.

Davis, D. [1966], *A History of Shopping*. Routledge & Kegan Paul, London.

Earle, P. [1989], *The Making of the English Middle Class*. Methuen, London.

Fowler, C. [1999], "Changes in Provincial Retail Practice during the Eighteenth Century." in N. Alexander & G. Akehurst (eds.), *The Emergence of Modern Retailing, 1750-1950*. Cass, London.

Gerhold, D. [1993], *Road Transport before the Railways*. Cambridge UP, Cambridge.

Holderen, B. A. [1989], "Price Productivity, and Output" in G. E. Mingay (ed.) *The Agrarian History of England and Wales*, Vol. VI. Cambridge UP, Cambridge.

15) 本論文（下）の分も掲載した。

- Jefferys, J. B. [1945], *Retail Trading in Britain 1850-1950*. Lawrence & Wishart, London.
- Lemire, B. [1991], *Fashion's Favourite*. Oxford UP, Oxford.
- Leslie, K. & Short, B. (eds.) [1999], *An Historical Atlas of Sussex*, Phillimore, Chichester.
- Mckendrick, N., Brewer, J. & Plum, J. H. [1982], *The Birth of a Consumer Society*, Europa Publication, London.
- Mitchel, I. [1984], "The development of urban retailing 1700-1815", in P. Clark (ed.) *The Transformation of English Provincial Towns*. Hatchinson, London.
- Mitchel, I. [2010], "Retail innovation and urban markets c.1800-1850", *Journal of Historical Research in Marketing*, 2-3.
- Mitchel, I. [2014], *Tradition and Innovation in English Retailing, 1700 to 1850*. Ashgate, Farnham.
- Mui, H. C. & Mui, L. H. [1989], *Shop and Shopkeeping in Eighteenth Century England*. McGill-Queen UP, London.
- Peren, R. [1989], "Markets and marketing" in G. E. Mingey (ed.), *The Agrarian History of England and Wales*, Vol.6 . Cambridge UP, Cambridge.
- Scola, R. [1992], *Feeding the Victorian City*. Manchester UP, Manchester.
- Shammas, C. [1990], *The Pre-Industrial Consumer in England and America*. Oxford UP. Oxford.
- Smail, J. [1994], *The Origins of Middle-Class Culture*. Cornell UP, Ithaca.
- Stobart, J. & Hann, A. [2004], "Retailing Revolution in the Eighteenth Century?", *Business History*, 46-2.
- Stobart, J. [1998], "Shopping Streets as Social Space" *Urban History*, 25, part 1.
- Stobart, J. [2011], "Gentlemen and shopkeepers", *Economic Historical Review*, 63-3.
- Wadsworth, A. P. & Mann, J. de L. [1931], *The Cotton Trade and Industrial Lancashire 1600-1780*, Manchester UP, Manchester.
- Walsh, C. [1995], "Shop Design and Display of Goods in Eighteenth-Century London", *Journal of Design History*, 8-3.
- Weatherill, L. [1987], "The business of middleman in the English pottery trade before 1780", in R. T. T. Davenport-Hines & J. Liebenau (eds.) *Business in the Age of Reason*, Cass, London.
- Willan, T. S. [1970], *An Eighteenth-Century Shopkeeper*. Manchester UP, Manchester.
- 小西恵美 [2015] 『長い18世紀イギリスの都市化』 日本経済評論社。
- 川北稔 [1983] 『工業化の歴史的前提』 岩波書店。
- 道重一郎 [1989] 『イギリス流通史研究』 日本経済評論社。
- 道重一郎 [1991] 「近代的商品流通の成立」『市場史研究』 9。
- 道重一郎 [1996] 「イギリス産業革命期における地域経済と交通」『経済論集』（東洋大学）22-1。
- 道重一郎 [1998] 「消費経済の形成と小売商業の役割」『経済と社会』 13。
- 道重一郎 [1999] 「イギリス中産層の形成と消費文化」 関口尚志、梅津順一、道重一郎編『中産層文化と近代』 日本経済評論社。
- 道重一郎 [2005] 「近代イギリスにおける都市市場の展開と変質」『市場史研究』 25。
- 道重一郎 [2008] 「18世紀ロンドンの小売商と消費社会」『経営史学』 43-1。
- 道重一郎 [2010] 「市場史に見るイギリスの近代化」 山田雅彦編『伝統ヨーロッパとその周辺の市場の歴史』 清文堂。
- 道重一郎 [2012] 「消費空間としての18世紀イギリス都市」 中野忠、道重一郎、唐澤達之編『18世紀イギリスの都市空間を探る』 刀水書房。
- 道重一郎 [2013] 「ロンドンの仕立商（上）」『経済論集』（東洋大学）39-1。
- 道重一郎 [2014] 「ロンドンの仕立商（下）」『経済論集』（東洋大学）39-2。

18世紀イングランド南部農村地域の店舗主（上）

道重一郎 [2016] 「18世紀イギリス社会における消費社会とジェンダー」 道重一郎編 『英国を知る』 同学社。
山下幸夫 [1968] 『近代イギリスの経済思想』 岩波書店。